

学校名		河東中学校	
学年		3年3組	
氏名	平川 瑞己	ひらがな	みずぎ

題名 身近にある税の支え

私はこれまで「税」と聞くと、大人が働いて払うお金というイメージしかありませんでした。テレビなどで「税金」という言葉を耳にしても、自分にはまだ関係ないと思っていました。しかし、身近なことで考えてみると、実は私の生活の中にかくさんの税が使われていることに気づきました。

その中でも特に忘れられない出来事があります。私が赤ちゃんの頃、熱性けいれんを起

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

こし、救急車で病院に運ばれたことがあると母から聞きました。突然のことです。母は驚き、不甲斐ない思いでした。たうです。しかし、通報からすぐに救急車が駆けつけ、病院へ連れて行ってもらったことがありました。母は一本当に良かった。と何度も話していました。私はそのときのことを覚えていませんが、もし救急車が無かったら、母はどうしたらいいのかわからなかったに違いないと思います。

その救急車や病院の体制を支えているのが

中学生の「税についての作文」原稿用紙

作品番号	1	2	3	4	合計

税金だと知ったとき、私はとても驚きました。救急車が無料で使えるのは、多くの人が払う税金によって成り立っているからです。自分の命が守られた出来事が、みんなの税金に支えられていたと分かり、税はとても大切なことだと思います。

また、私が今よく利用している市民プールも税でまえられています。私は小学生の頃、体を強くするためにスイミングスクールに通っていたいました。喘息持ちだったので水泳をす

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

ると呼吸が楽になり、体力もつきました。しかし、中学生になってからは勉強や部活動が忙しくなり、スイミングをやめてしまいました。た。それでも休日には父と一緒に市民プールに行き、泳ぐようにしています。料金が安く気軽に利用できるのでとても助かっています。広いプールで思いきり泳ぐと、心も体もリフレッシュでき、健康を保つのに役立っています。まず、そのプールの維持や管理にも税金が使われていると知り、感謝の気持ちを持つよう

になりました。

私は今まで税は「取られるもの」という少し遠い存在だと思っていました。しかし、実際には安心して生活するためには欠かせないものです。もし税がなかったら、救急車は来てくれないかもしれないし、市民プールのような公共施設は利用できなくなるでしょう。毎日の生活がとても不便で不安なものになるかもしれません。

このように考えると、税はただのお金では

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

なく、私たちの生活を支える大きな力なのだと思います。社会全体で少しずつ出し合うことで、困ったときに誰もが助けってもらえる仕組みになっていくことが、とてもありがたいことだと感じました。

この先私は、身近なところにある税の働きについてもっと目を向けていきたいです。そして大人になってからときには、社会の一員として税を支える側に回れるように、しっかりと働いて役に立っているような大人になりたいです。